

## ■「森と草原の地球教室」：心に残るみんなで作った小さな村

アトリエ・フラワーチャイルド 主宰

名川敬子

「ねえ！ねえ！！こっち来て！僕たちの家に入って入って！」

「見て見て ここ 扉がついているんだよ」

「ここが私のおうちだよ！そしてここが私のお部屋だよ、葉っぱの絨毯気持ちがいいよ！」

10月29日、愛・地球博記念公園の「食の広場」は、その日、子ども達にとっての夢の空間になりました。食の広場を歩いているとあちらこちらから声がかかり、力を合わせて作り上げた「家」に招かれました。どのグループも、その日初めて会った人同士であるはずなのに、家族といってもいい程の雰囲気、自分たちの造りあげた家の創意工夫や自慢話に花が咲いていく。大人も子どもも皆とびっきりの笑顔だった。全身全霊で遊ぶ。この感覚。皆の家を周りながら子どもたちと一緒に「家」とふれあううちに、私はなんだか自分の子どもの頃の体験を、記憶というより、身体の細胞の1つ1つが思い出していくのを感じていたのです。

私は小さい頃、いわゆる名古屋の新興住宅地と呼ばれる場所に住んでいました。それでも住み始めた頃はまだまだ周りには里山があり、森があり、川が身近にありました。数珠玉の草原は私たちの背丈よりも高く外からは見えなくなって、そんな中に自分たちだけの空間をつくりおまごごとをしていました。堤防の橋の下では、流木を拾い、段ボールをあちらこちらから運び、秘密基地を作ったり、竹やぶの中にも森の中にもいつでも私たちが隠れることのできる「家」はたくさんあったのです。大人たちの目から逃れられる空間は、子どもたちにとって大切な大切な遊び場所。映画「20世紀少年」の世界と同じ世界に私は住んでいたのです。

高度成長期真っ只中だったあの頃、急激に進化していった日本は、映画と同じく、私の住んでいる周りもみるみるうちに飲み込み始め、どんどんと開発されていきました。残念なことに、日が暮れるまで遊び回っていた私たちの遊び場は次々と壊され、そこには新しい家が建ちならび、道路ができ公園ができていき、河原はコンクリートで固められていったのです。子ども心に、なぜ大人たちは美しい風景を壊してしまうのだろうか、不思議に思ったものでした。ブルドーザーが目の前で私たちの大切な秘密基地を壊していくあの風景と憤りのない悔しさを私は今でも忘れていません。

しかし忘れていない事はそんな悲しい記憶ばかりだけではなく、遊び場はなくなっても背の高い草をかきわけて歩き回った時の草の匂いや、傷だらけになりながら木や崖をよじのぼった時の手の感触、鳥の巣の中の卵のあたたかさ、カエルや魚を手づかみ

で捕まえたひんやりとしてぬるりとした感覚。草の上や河原に寝転んでいつまでも雲をながめていた時に聞こえた川のせせらぎの音や、ひばりの声、虫の声、森の中でみつけたびわの木やグミの木のあまざっぱさ、門限過ぎて遊びまわる言い訳にタケノコ、つくし、よもぎなどを採り、母のご機嫌をとろうとしてもやはりしかられ、夕食に食べた時のあのほろ苦さ。五感のセンサーを思い切り使って遊んでいた頃の記憶はすぐにでも鮮やかに蘇るもので、簡単に自分の中からなくなるものではないんだな、とあらためて感じたのでした。

もちろん都市整備による開発は、安心安全を得るために、人が社会生活を送る上で、それは必要不可欠なこと。開発がすべて悪いとは、恩恵を受けながら生活をしている私には言えるはずありません。先住民族の方々の暮らしの中にも今、都市化における開発の波が押し寄せていると聴きます。それを止める権利も私達にはないでしょう。しかしながら今回のこの「森と草原の地球教室」に参加して、あらためて子ども時代に自然とふれあいながらうらやましくしていくことの大切さや、自らの手をつかい足を運び働くことの意味、循環型社会を次世代にも残していくことが出来る様に、今の社会を見直し継続できる方法を見つけ出し実行していくことが大切、いや必要なんだ、とかんじたのでした。

皆が力をあわせて作りだした小さな村はたった一日で姿を消してしまいましたが、参加してくれた皆の心と身体にはいつまでも残ってくれることと思います。それがやがて次への架け橋になり、一人一人の行動へと結びついてくれることを祈らずにはられません。デニス・バンクスさんが歌った歌が耳に残っています。歌詞が理解できたわけではないのですが、あの力強い歌声と魂の響きが身体の奥底に共鳴し、私の中で新たな火種となり、新しい一歩になってくれることでしょう。

皆さん また きっと どこかで 逢いましょう。そしてそのときには、今よりもきっと素敵な地球になってくれることを願って今日の一歩を共に歩み続けていきましょう。本当にありがとうございます。

